

◆◆◆ ミャンマーを襲ったサイクロン (Nargis) と地域気象情報

今月 5 月 2 日 (以下特に断らない限り、現地時間) に、サイクロン (Nargis(ナルギス)) がベンガル湾からミャンマーに上陸し、同国南部を中心にした強風とエーヤワディー (イラワジ) 川等の下流域 (河口から 30~40 k m まで) での高潮等により 13 万人以上の死者・行方不明者をはじめとする甚大な被害がもたらされたことは、連日報道されているところです。ここでは、ミャンマーの水文気象局 (日本の気象庁に相当) に対して、周辺の地域気象センターからこのサイクロンに関する気象情報がどのように提供されたかについて世界気象機関 (WMO) の広報資料などをもとに紹介します。

台風やサイクロンの熱帯低気圧は、我が国をはじめ多くの国に毎年多大の被害をもたらしていることから、国連の専門機関のひとつである WMO では、6 つのセンター (*) を設けて、熱帯低気圧に関する地域気象情報を域内各国の気象機関に提供しています。我が国の気象庁は、西太平洋域の台風についての同センターを担当していますが、赤道以北のインド洋のサイクロンについては、インド気象局 (ニューデリー) が、タイ、ミャンマー、バングラデシュ、インド、パキスタン及びオマーンの 6 各国の気象機関に関連する情報の提供を行っています。また、シンガポールにある ASEAN 諸国を対象とする 地域特別気象センター からは、ミャンマーを含む域内の国々の気象機関に地域の気象情報が毎日届けられています。

(* マイアミ、ホノルル、東京、ニューデリー、ナンデー、レ・ユニオン)

ベンガル湾で 4 月 28 日発生した今回のサイクロンについて、ミャンマーの気象当局は、上陸 (5 月 2 日夕刻) 数日前の 4 月 27 日にニューデリーのセンターからの情報をもとに、同サイクロンの予報をテレビや新聞を通じて国民に発表していました。また、同気象局では気象衛星画像を、ASEAN 地域特別気象センターからインターネットを通じて入手していました。4 月 29 日にはミャンマーの気象当局は、これらの情報をもとに政府関係当局にサイクロンの警報を提供するとともに、5 月 1 日にはサイクロン襲来についての報道機関への説明会を行い、5 月 2 日 (上陸当日) の同国の新聞には「サイクロン・・・」の見出しの記事が掲げられたと報じられています。

ニューデリーのサイクロン・センター (インド気象局) では、4 月 27 日 06 UTC から 5 月 3 日 06 UTC の間、サイクロン (Nargis) についての情報をほぼ 3 時間毎に延べ 40 回以上発表し、ミャンマーの気象当局を含めて同センター域内の気象当局に届ける作業を行なったとしています。5 月 1 日 06 UTC (上陸の約 36 時間前) の同センターの予報では、2 日夜までにミャンマー内の北緯 16~18 度の間 (ヤンゴン付近) に到達するとし、さらに 1 日 21 UTC の予報では、最大風速は 90 ノット (50m/s) 以上であると、また 2 日 09 UTC には、2 日 12 UTC までに北緯 16 度線を通過すると、それぞれ発表していました。実際のミャンマー南部への上陸は、2 日午後 6 時前後、またヤンゴン付近の通過は 3 日午前 6 時頃で、最大風速は 50~60m/s とされていました。

甚大な被害の原因としては、直前に強まった勢力のままの上陸 (上陸直前の中心気圧は 962 ヘクトパスカル)、速い移動速度、さらには襲来地域の標高の低さなどに加えて、ここ数十年間同国ではサイクロンの被害が隣国のバングラデシュに比べ少なく防災意識が必ずしも高くなかったこと、高潮用シェルターをはじめとする防災インフラの未整備、さらには防災情報の伝達システムの不備など色々な点が挙げられています。これらについては、今後の調査とそれに基づく原因の究明はもとより、上述の気象情報等がミャンマー国内でどのように各住民に伝わったかの把握もなされなければならないところです。最後に、犠牲者の冥福を祈るとともに、早急な復興と気象情報の拡充とその適切な利活用策の構築が進められることを強く期待したい。

(財団法人気象業務支援センター理事長 長坂 昂一)